

カルテ・座席表で子どもが見えてくる

星野 恵美子

一、授業は変わったか

新学力観が叫ばれて久しい。

なるほど、新しい世紀に生きる子どもたちを育てるには、自ら学ぶ意欲をもち、社会の変化に主体的に対応でき、基礎・基本をしっかりと身につけ、自分の個性を生き生きと発揮できる力をつけることだと納得はする。

しかし、実際はどのようなのだろう。教師の指示を待っているクラスはないだろうか。黒板の前で、独演会を演じている教師はいないだろうか。自分の授業は以前のそれと比べて、何処がどのように変わっただろう。

日々、子どもに追われ、提出書類に追われ今まで通りの授業をしている自分に気づく。授業を変えねばならない。子どもを受身にした解説授業をやめねばならない。板書だって、教室経営だって、もっともっと子どもに任せていい。自分の脳みそで考え、自分の足で立つ子どもを育てるには、教師の過保護は禁物だ。過保護な育ち方をしてきた子が、みんなの歩調に合うようになるまで、どれだけ苦勞することか。放任されたままで育った子が、社会性を身につけるまで、どれだけ苦勞することか。私たちは、過保護も放任もしてはならない。

と、ここまで威勢よく進んだが、過保護授業と放任授業ではないバランスのとれた授業とは一体どういうものをさすのか、はたとつまってしまう。どうすれば授業を変えられるか。そのことを考えてみたい。

二、カルテ・座席表は授業を変えるか

6/11 社「日本はオレンジ戦争に負けたか」負けてはいない。アメリカがひきさがった。オレンジ戦争という言い方は、大げさでもなんでもない。

五年の日本の農業「果物」を教材化した時のカルテである。輸入牛肉の学習から派生した輸入オレンジの問題を学習した時のものだ。オレンジ戦争は政治的には勝ったかも知れないが、農家にとっては負けたことになる。それが証拠にみかんが売れなくなってやめる農家がふえている。(安東小の近くのみかん農家を調べて)

6/21 社「みかん農家はやめたくてやめたのか、やめさせられたのか」やめたくてやめた。もうからないから、やめた方がよいと自分で判断した。それより、土地を売ってもうけた方がよっぽどいい。

座席表に善かれた記録から、この子の個性が見えてくる。

きっぱりと結論づけるとひきさがらない。熱血漢だが、考えの根拠は浅い。

カルテにそう記入する。はたして、そうだろうか。

6/25 社「みかん農家は自分からやめたのか、やめさせられたのか」

授業記録 一部

K 瀬名のおばさんに電話で聞いたんだけど、みかんの木を切って写真にとって送れば、一本につきいくらとかお金をくれるそうです。おばさんは今までずーっとやってきたみかん山だから、木を切りたくないって言ってました。でも、私は、やめてもお金がもらえるし、新しい会社に行けばお金がもらえるから、やめたくてやめたのだという考えです。

S みかんの木を切ったからって他の会社に行くことはないんじゃないですか、他の物を作ればすむんじゃないですか、僕は全部が全部、みかん農家をやめるわけじゃなくて、A君が言ったようにあとつぎがないとか事情のあるみかん農家がやめていくんだと思います。

M それもそうだけど、ジュースや缶詰用のみかんが全然売れなくなったとニュースで見たけど、せっかく作っても売れないし、あとつぎもないとなれば、しぶしぶやめたということになる。つまり、自由化で、オレンジが輸入されるようになったからよけいにそうなったことになる。ということはやめさせられた。

S でも、この前、静岡のみかんは本当に売れていないのか調べたら、品質の良いみかんは売れていて、オレンジよりみかんの方が好きという人もたくさんいました。みかん農家の中には、ずっと続けようと考えている家もありました。

M 市役所でみかんのことを聞いたら、日本のみかんの方が、外国のオレンジより安心なので、みかん作りを続けてもらいたいと言ってました。

彼はこの授業のあと、こんな発言をした。

6/25 社「いやがらせをされたり、無理やりやめさせられるとしたらかわいそうだね。僕ならお金くれるならやめる。お金をくれるってことはやめろってことなのかなあ」

ノートや発言などを座席表に記入し、いくつかをつなげて、その子の個性をつかもうとする。個性というのは、十人十色である**心の働き**をしている。みんなちがってみんないい

という価値をもっている。

しかし、中には、反社会的であったり、周りを不幸になる個性もある。よりよい個性を伸ばす対応をしてやるのが私たちの役目だと考える。

相手のおかれた立場を思いやるやさしさがある。思ったことはそのまま言動に表す。

カルテにそう記入する。そういえば思い当たるふしがある。

逆上した友だちに組み伏せられて、殴られた時、そのまま相手の静まるのを待ったことが。女の子にけられても、お返しは言葉でしかない場面が、「先生は犯人探しをしたいのか」と私に言った時のことが。

カルテ・座席表は授業を変える。私はそう信じている。この授業は、私の計画では、「みかん農家は減り続けるのか」と続く予定だった。しかし、子どもたちの思いから「なぜ、お金を出してまでみかん農家をやめさせるのか」という問題に変わった。自信をもって計画を変更できるのは、子どもをつかんでいるからだ。子どもをつかんでいると思ったら大丈夫がいだという自分への戒めがあるからだ。どんな問題を追究していくか、問題がつまらないものであったり、底の浅いものであれば、追究につながらない。

カルテ・座席表を大事に進めていくと、子どもの背丈に合った問題も見えてくる。

三、座席表授業案の日常化

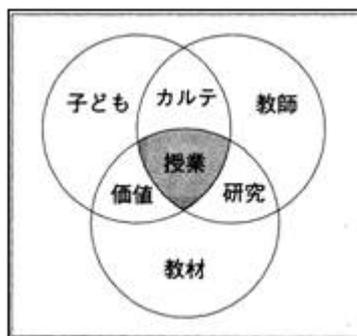
最近、『カルテ・座席表で子どもが見えてくる』という本を出版した。ついでの折に読んで戴けたらうれしい。

私は、この本の中に、

座席表授業案の源流はカルテである。そして、もう一方の源流は教材である。カルテと教材を重ね合わせて授業は流れ始める。

と、書いている。

カルテ・座席表が、授業の中で具体的に使われ、生かされたものが、座席表授業案といえよう。



授業を支えるもの

いろいろな場面で違った貌（かお）を見せるのが人間である。この子を理解したなど思えるはずもない。それだからこそ、座席表授業案も用意して授業に臨む。

教室に手ぶらで行くことはないか。手ぶらでいって授業に行き詰まったことがある。何をもって教室に入って行くか。資料か、教具か、一人の子への教育的願いか、面白い学習問題か。いつでも、もてるのはある子への教育的願いである。なぜならこれは、教師の思考と想像の世界に存在するのだから、どんなに忙しくても可能だから。毎時間のことだから大変だが、二人や三人ならできる。

私は単元を選んでやるが多かったので表①については、全員記録しておいて、授業に臨むことが多かった。カルテ・座席表で子どもが見えてきたら、座席表授業案で、授業を面白いものにしたい。そして、個の違いに目を向けたい。

一時間に一人でも二人でもいい。目を向けて、心をかけて、その子によって感動する教師でいたい。子どもは何も言わない。でも表情にでる。楽しい授業、面白い授業をする先生を待っている。

ほとんど秀でたものをもたない私は、地道に子どもを見、子どもを読み、座席表授業案を手がかりにやっつけていこうと考えている。

座席表授業案に記録しておきたいこと

- ① その子の考えや思い
- ② 教師の期待や願い
- ③ 本時どう対応するか。
手だてはどうするのか。
等

29①家康の考え方、やり方すべて悪いと考えている。②戦国時代からの流れの中での江戸時代を見させる必要がある。③禁教はキリスト教徒にとって辛いことと踏絵等から知らせたい。

四、教師のセンス

センスは磨くものだそうである。そういえば我々女性族はついでがあればウィンドーショッピングをし、カタログを見、人の身なりを横目で見て、洋服へのセンスを磨いている。

教師のセンスとはどんなものをさすのか。私は感性だと思う。つまり、何に心を動かされるかという問題だと思う。子どもの発言に敏感に反応する教師、子どもの疑問からよい問題を導き出せる教師、対応にユーモアがあって子どもの心をゆらす教師、より役立つ資料をよい場面で使える教師、これらはすべて教師のセンスにかかっていると思う。

センスは天性のものもあろうが、磨かれて育つものでもある。経験が助けることもある。私はいつも子どもの助けを借りてきた。カルテ・座席表がそうだった。

三年生と学区探検をした。子どもたちは口々にいろいろなことをいう。「おいものはっばだ」「すげえ」「ちがうよ。おいもじやないよ。あれはれんこんだよ」計算や漢字は苦手なN子が答えている。私は早速、授業を組んだ。

れんこんの穴は、いくつある？

N子を生かし、クラス子どもたちを生かす。何をとり上げるか、教師の役割は大きい。

一年生を担当した時のことである。どうも好きになれないタイプの子がいた。それだけに、教師としては後めたいし気になる子だった。

一年生とお店やさんごっこをやった。一回目はにせものの品物をにせもののお金で売り買いした。お弁当屋さんの品物が大量に売れ残った。お弁当屋さんをやった子は、とてもがっかりしている。この子のグループだった。

売れ残った品物を本当のお弁当屋さんはどうするのだろう？

冷蔵庫に入れるのではないか。ダンボールに積みこむのではないか。欲しい人にやり、また売ったりするのではないか。でも、冷蔵庫だって入りきらなくなったらどうするのかな。ダンボールじゃ腐っちゃうよ。売れ残りなんて欲しがらないよ。ということで調べてくることになった。

この子は、「品物は三日位売れる。残ったら豚の餌、魚は干物、パンはまとめて明日売る」と聞いてくる。そして、「豚さんが太ったらかわいそう。おなかをこわしちゃったら困る」としきりに同情をよせている。

私は、この授業をやって、この子が少し好きになった。私からこの子に近づこう。

お母さんのカレー作りも心に残っている。インスタントカレーには、お母さんの愛情が入っていません。と言う子がいる。愛情って何ですか、と訊く子がいる。うちはカレーにバラ肉を入れると発言する子がいる。薔薇の花なんかカレーに入れるんですかと問う子がいる。

バラ肉って薔薇の花？

子どもの感性に学ぶところは大きい。時代はめまぐるしく変化している。教師が余っているという。つまらない教師があぐらをかいていられる時代はとうに終わったようだ。情報は津波のように子どもにおしよせる。教師はどうあるべきか。難しい時代である。

参考文献

星野恵美子『カルテ・座席表で子どもが見えてくる』明治図書 一九九五年

(静岡・静岡市立服織小学校)

(『考える子ども』1995年11月号より)